

昭和の南海地震体験談

氏名:山中 登(やまなか のぼる)

生年月日:昭和5年3月14日

地震を体験した場所:日高町比井・自宅2階寝室

当時の家族状況:父、母、祖母、弟2人、妹



1) 地震発生時の状況

当時16歳で、漁師をしており、自宅2階の寝室で布団に入ったまま、同じ部屋に寝ていた祖母と話をしていた。そろそろ漁に出かける為に起きなければならない時間なのだが、前日に高熱を出しており、「漁は休むかも」等と話をしていた。自宅前の浜では、漁に出かける準備をしているトロール船の焼き玉エンジンの音がブンブン鳴っている。もうすぐ焼き玉の焼き頃で、エンジンをかけるだろう、と思っている時だった。急にガタガターッと激しい揺れが来た。揺れはすぐ収まるだろうと、暫くそのまま布団の中にいたが、長い間揺れるので、2人であちこちに掴まりながら階段を降り、1階を通り、玄関から外に出た。正面が南東の方向で山が見えるのだが、山の上の空が真っ黄色になっていて、左右の空には稲妻のようなピカピカした光が見えていた。まだ夜が明けていない暗い時間帯だったので、はっきり見えた。

2) 津波襲来時の状況

揺れが収まった後、父が「こんだけ大きい地震は初めてや。安政元年に大きい地震が揺った後、大きい津波が来た。この地震、確かに津波来るかわからん」と言っているうちに、浜から「津波やー！津波やー！」という声が聞こえてきた。やっぱり、と思いながら、家族全員で何も持たず、自宅横の道を上り、高台のお寺に避難した。小学校の先生の言葉を思い出し、大きな木の根元に行き、近所2、3軒の人達と一緒に腰を下ろした。余震も続いており、暫く座っていると、道の下の方でガチャガチャと音がしてきた。何かひっくり返ったような、何の音が判らない音が暗い中で響いており、恐ろしかった。夜が明け、明るくなってからも音は鳴っており、津波に違いないと思った。祖母から安政地震の話聞いていて危険な事だと知っていた為、様子を見に行かなかった。音が静まり落ち着くまで待機し、朝9時頃ようやく自宅に戻った。

3) 家族の行動・被害

津波と聞いてすぐ避難したので、家族は全員無事だった。自宅1階部分の床上1mの所まで濡れた跡がついていた。仏間の仏壇が浮き上がったように前に倒れていた。

4) 集落・周囲の被害

地域の家屋は床上浸水した。造船所近くの家屋では、地震の後、横道に出て話をしていたら、庭の方でカチャカチャ音がしてきたのでよく見ると、水が入ってきていて下駄がぶつかる音だった。「津波だ」と言って濡れてはいけない物を避けようと思ったが、うろたえてしまっているうちに腰まで潮が来たので、慌てて裏の山へ駆け上がった。避難場所で、水が引く時のゴォーツという音と、水がどこかに落ちているようなザァーツという音を聞いたそうだ。造船所の事務所はドアの上敷まで濡れた跡がついていた。

地震の時、ちょうどエンジンをかけたトロール船の機関長は、港の入り口からいつも見える山の姿が半分以上波に隠れていたことを不思議に思いながら出港した。沖に出るまで数回、例の無い程の波をやり過ごしたが、沖は大変穏やかで、いつも通りの作業をし、夜に帰港してみれば大騒ぎになっており、自身の家屋も浸かっている、非常に驚いた。地震の事も津波の事も全く知らなかった。



5) 地震・津波後の生活

漁はすぐ再開できたが、自宅の片付けが大変だった。中でも畳の汚れを落とし、乾かす作業が大変だった。仕事が第一だったので、休みの日にしたり、時間をやりくりしながら片付けた。元通りの生活に戻るまで約1年程度かかったと思う。食料も全て潮に浸かり食べられなくなったので、親戚がおにぎり等を差し入れてくれ、大変ありがたかった。飲み水はお寺近くの井戸を借りて確保した。近所の人達も同じ所でいただいていた。

6) 次の災害への備え

地区ごとに避難場所が決まっており、防災訓練や避難訓練に参加している。防潮扉の担当であったが、非常の際、どこにいるか分からない為、扉近くで気付いた者が誰でも操作できるよう、後世に伝えている。持ち出し袋として、持てる範囲のリュックに貴重品や着替え等を入れ、常備している。